

## マダイの中間育成

井上 顕・宮城美加代<sup>\*1</sup>・石垣 新<sup>\*2</sup>・真境名真弓

### 1. 目的

平成 13 年度は養殖用の大型種苗(全長 50 mm)20.5 万尾を生産する。

### 2. 材料と方法

中間育成は種苗 32 万尾(14.9 ~ 45.4 mm)を用いた。飼育は屋内 50kl 円形水槽 5 面および 100kl 円形水槽 1 面で開始した。その後、大型個体と小型個体の選別、飼育密度調整および疾病時の池替えにより、最終的には 50kl 円形水槽 9 面および 100kl 円形水槽 1 面を使用した。

給餌は各水槽に自動給餌機 2 ~ 4 台を設置し、配合飼料を給餌した。給餌量は稚魚の魚体重を適宜測定し、1 日あたり魚体重の 5 ~ 10%量を給餌した。

底掃除は毎日行い、回収された斃死魚の計数を行うことで、生残数の推定を行った。

疾病発生時は飼育水に水産用エルバージュ(ニフルスチレン酸ナトリウム)を 1kg/10kl 添加して薬浴を行い、斃死状況に応じてオキシテトラサイクリンの経口投与を行った。

出荷時はハマフエフキと同様に、手作業により全長 50 mm以下の個体と骨格異常魚の選別を行い、ベルトコンベアー式のフィッシュカウンターを用いて計数を行った。

### 3. 結果

平成 13 年度の中間育成結果を表 1 に示した。

中間育成中に 50kl 円形水槽 2 面で、ピブリオ病と滑走細菌症とみられる疾病の発生があった。その原因は、飼育密度の高いことであると考えられたため、直ちに分槽を行って飼育密度を低くし、エルバージュによる薬浴と斃死状況に応じたオキシテトラサイクリンの経口投与

を行った。その結果疾病発生から 10 日間で、斃死する個体がほぼ見られなくなった。

最終取り上げ尾数は 208,996 尾(平均全長 52.8 mm)であり、歩留まりは 65.3%であった(表1)。その結果、生産目標の 20.5 万尾を達成することができた。これまでに陸上水槽で行われた中間育成の生残率は、60 ~ 70%であり、今回の中間育成結果は例年並であった。

出荷時の計数は、これまで手作業で行ってきたが、今年度からベルトコンベアー式のフィッシュカウンターを導入した。その結果、一時間当たりの計数尾数は、手作業時の約 2 倍に当たる 1 万尾であり、時間の短縮ができた。

表1 平成13年度マダイ中間育成結果

収容月日	(月日)	2月9日~16日
水槽規模	(kl)	50kl×9面、100kl×1面
稚魚の収容数	(尾)	319,893
開始密度	(尾/kl)	914
飼育日数	(日)	23日~31日
取揚尾数	(尾)	208,996
生残率	(%)	65.3
取揚平均全長	(mm)	52.8
飼育水温	(°C)	19.1~21.5°C

### 4. 参考文献

木村基文・玉城英信・仲村伸次.2001.マダイの種苗生産.平成 11 年度沖縄県栽培漁業センター事業報告書,pp19-21.

中田祐二・木村基文・本永文彦・仲村伸次・真境名真弓.2002.マダイの中間育成.平成 12 年度沖縄県栽培漁業センター事業報告書,p42.

\*1 執筆責任者

\*2 現在の所属:沖縄県畜産試験場